

子規會誌

久 女 と 松 山

塩崎月穂……………一

若き日の秋山真之と明治の海軍

松尾忠博……………二

興居島の誹諧 — 田村三代 —

白田三雅……………一九

一 遍 と 子 規 (つ づ き)

越智通敏……………二四

四〇号 平成元年 一月

例 会 記 録

第八十六回子規忌ならびに  
九月例会(第五四七回)

昭和六十三年九月十九日(月) 正宗寺本堂 参加

七十六名

子規忌法要につづいて記念講演を行う。

子規忌法要次第

開式のことば 副会長 金村治三郎

法要読経 正宗寺 田中義晃師

献詠披講 幹事 森 緑葉

子規遺作朗詠

漢詩 会員 松本 松吉

短歌 会員 永田 茂子

俳句 会員 村上 季高

尺八 会員 桐間 竜芳

焼香 副会長 金村治三郎

遺族代表 佐伯 徹也

来賓・有志・役員 来賓・有志・役員

副会長 和田 茂樹

閉式のことば

記念講演「子規と鶴外」

閉会あいさつのおと記念撮影。

幹事 浦屋 薫

講師 和田 茂樹

十月例会(第五四八回)

昭和六十三年十月十九日(水) 正宗寺本堂 出席

二十九名

浦屋薫幹事の司会により開会、金村治三郎副会長の

あいさつにつづいて講演。

講演「霽月と格堂との転和吟―北羽新報を中心に―」

幹事 足立 修平

十一月例会(第五四九回)

昭和六十三年十一月十九日(土) 正宗寺本堂

出席二十七名

浦屋幹事司会により開会、金村治三郎副会長のあい

さつにつづいて講演。

講演「子規を考える一日」

子規博学芸員 宝来 淑子

# 久女と松山

塩崎月穂

杉田久女と松山との関係は俳誌「葉桜」とのつながりによるものである。

久女と「葉桜」との出会いはその創刊当時にさかのぼる。創刊者玉木北浪は、はじめ「葉桜」を長門から発行するつもりであったが、北浪の勤務先であった太田鋳業所が急に閉鎖されることになり、北浪は松山で起臥することになった。創刊を初夏の頃と決められていたので葉桜の名が付けられていたが、松山で創刊されたのは大正十一年九月十九日の子規忌の日であった。

北浪が長門から来た関係で「葉桜」と北九州の俳人との交流は自ら生じたものである。小倉にいた久女も吉岡禪寺洞と共に早くから「葉桜」とのつながりをもっていた。久女の名が「葉桜」に出ているのは大正十二年九月号からであるが、その消息欄に「杉田久女氏、六月初旬以来久敷病院入院せられてありました。漸く快方御静養中、御快癒を祈る」とあり、またその号の「俳諧雜観」という欄に「一、古今の俳句にて貴下の御愛吟中より三句を録していたゞきたし。二、俳句に対する貴下の消極、積極の標語又は警句。三、御近詠二句。」という質問に対し久女は次の解答を寄せ

一、四五人に月落ちかかるおどりかな

蕪村

秋たつや素湯かんばしき施薬院

同

荒海や佐渡に横たふ天の川

芭蕉

二、カビのはえたる過去の俳人たる私には警句も標語も存じつかず、されども米の飯のあかざる如く俳句をすて去るにもあらず、

不即不離の状態にて対し居り候。

三、涼み船灯赤くゆりつこぎ寄りぬ

久女

横顔のおとがひうすく夏やせぬ

同

川上にきくむしのねや舟あそび

同

「葉桜」は大正十二年末、玉木北浪がスマトラへ赴任することになり、大正十三年より塩崎素月がその後を引継ぐことになった。杉田久女が松山を訪れたのは二度である。その第一回は大正十四年五月、松山での高浜虚子歓迎俳句大会のときである。その頃の久女書簡が残っている。日付は大正十四年五月十五日で塩崎素月宛である。

御親切なる御玉章を頂戴いたしましたして誠にうれしく御礼申上げます。

虚子先生の御来松と承りまして大に心うごき、どうか都合

して御地へ向ひ度くと存しますが、まだ子供がはしかの後で  
ございますので、はつきりと申上げられませぬ。ついでに虚子  
先生は何日に松山御着でございますか、折りかへし御知らせ  
いただけますなら幸ひでございます。私はもし参上いたすなら  
ば二十二日夜頃当地出立二十三日頃御地へ罷出で俳句会へ参上  
いたし度いと考えてますけど、前に申上げたとはり、まだ子供  
が病後でございますので、たしかな事は申上げられませぬ。そ  
れに旅なれぬ私は宿などの事もころろにまじりまして何  
となくまたためらひぎみの心で居ります。先は御礼かたぐいお  
たづね迄 かしこ。

(大正十四年) 五月十五日

久女拜

塩崎様

宛名は松山市持田一七四、塩崎素月、発信は小倉市堺町百十一、  
杉田久女である。

虚子の来松で会に参加したいが子供の病後と旅なれぬ宿の心配  
のためらしいの気が、現われている。俳句大会は五月二十四日、松  
山公会堂で行われているが、二十三日朝、高浜港へ上陸したもの  
であろうか。

上陸やわが夏足袋のうすよこれ

久女

夏羽織とり出すうれし旅靴

同

の句を残している。五月も終わりなので初夏の気配が漲っている。  
萱町にあった松山公会堂での俳句大会のあと久女は虚子招待懇親  
会にも出席し、その時の紀行文を大正十五年「葉桜」三月号と五

月号に寄稿している。以下は久女の文章である。

虚子先生と芍薬(松山紀行)

大正十四年五月二十四日、松山公会堂に於ける高浜虚子先生  
の歓迎俳句会は出席者百余人。頗る盛会で、最後に虚子先生の  
御選評がすむと菖蒲池の汀に集って写真をとり、散会したのは  
もう夕方だった。

私は素月さんや黙禪博士にすゝめられるまゝに其夜、城山下  
の某一流料亭で催される虚子先生招待会へも御相伴する事とな  
ったのである。

虚子先生はお能で練えあげられた短軀に黒紋付の御羽織、お  
袴をめて御草履ばきで私共と並んで、松山の町を話しながら  
おひろいになるのだった。

料亭の二階では、床の間の正面に虚子先生、其左隣が村上齋  
月氏、野間叟柳氏お三方、左右に居流れる人々は素月氏をのぞ  
くほかは、皆松山のお医者様の俳人らしかった。皆様のお席の  
定まる間、私はひとり欄干へ行って目の前にそびえる城山を眺  
めてゐた。

こんもりした城山の若葉には日の色が消えて鴉が数十となく  
舞ってゐた。この町へ来た日から朝となく夕となく見上げては  
その若葉の色に私はひきつけられるのであった。藩公の祖先が  
植えさせたとか云ふ伝説のある此城山の頂上までもれ上った森  
は、櫻、椎、楠、檜、あらゆる種類の若葉が今あたかも柔らか  
い白緑、淡黄、濃碧或はうす紅に、深緑に常盤木のくろすんだ

縁と交りあって実に美しい眺めである。眺め入ってゐる中に、鴉はいつかねぐらへ落付き、若葉の面では夕靄にぼかされはじめた。「さあ、久女さんもこゝへお坐りなさい」と黙禪博士に呼び入れられて私は虚子先生の右隣、黙禪様との間に坐らせられた。

虚子先生は御紋付をおぬぎになる。他の皆様もみなお羽織をぬいでくつろがれる。その中に女は私たった一人、単羽織もぬがず、きちんと坐ったまゝ、所在なさに膝の扇子を弄び、中庭の向ふの広間を妓達が裾をひいて出入りするのを眺めたりしてゐた。やがてこゝにもおなじ様な妓達が塗膳をささげてはゐってきた。妓達がお鉢子をとり上げてつぎまわる。酒井博士の御挨拶があり、虚子先生もお袴の膝を止して。

「故郷の俳人達と一緒にかうしてくつろいで御馳走を頂きつゝ、昔語りをする」と云ふ事は自分にとって何より楽しい懐かしい事である」といふやうな意味の御丁寧な御言葉があった。松山風の疑ったお料理が次から次へと運ばれる。虚子先生は静かに箸をはこばれつゝ、白いお髻を胸迄たれた露月氏と、旧知の誰彼のお噂さ、お国の話など、松山言葉でお話しなされる。何年目かの御帰国で、歓迎会だの俳句会のためまだお墓参りもなさらず、城山へも上って見られず、丁度東京から来松中のお兄君にもまだ逢はれないとか、先生の旧いお家がどの辺であるとかのお話も出る。

はる／＼海を越えて子規居士や虚子先生のお生れ故郷へきて

先生にお目にかゝり、かうして近々と坐ってゐる自分をつく／＼有りがたく思ひ乍ら、私は先生のおうしろの床の、青磁の壺にうす紅色の美事な芍薬数輪、半開ばかりさしてあるのを明るい宵の灯色に見入るのであった。

お酒をおやめになった虚子先生は、妓にサイダーをとってこさせて御自分もつがせ「久女さんはこの方がいゝでせう」と私のコップにもつがせて下さった。

黙禪博士もあまりお酒を召し上らない御様子でひとりぼっちの私に、気がるく話し相手になって下さる。私が俳句をつくりはじめたのは大正九年頃が一番熱心で十一年頃にはやめてしまったと申上げると「それぢやあ、あなたの方が僕より先輩だ」と戯談おっしゃって「僕は作りはじめの頃からあなたの名には親しみをもってましたよ。私は松山へきてから盛んに作りだしました。丁度あなたがやめた頃ですね」などとお話になる。私は虚子先生に真佐子様や鶴女様（姫君）の事をおたづねしたり、お孫様はお幾人と気のきかないお尋ねをしたりして心の中にひとりおかしく思った。

黙禪博士は思ひ出した様に「虚子先生、こないだ米千代が先生のお出でを大変待ってました。お出でになったら是非知らせて下さいって頼まれましたよ」と云はれると「そうですか米千代が？」と虚子先生は目尻に笑ひ皺をお寄せになって、「まだこゝに居るのですか、この前来た時私は大分酔って米千代に世話をやかしたようです」、「米千代はその時先生にかいて頂い

た羽織の裏を大変大事にして、皆に自慢の種にしてゐるようです」「何でも酔った勢に、おもふ存分興にのつてかきなぐったのですね」と虚子先生はお笑ひになった。

席上吟の紙がまわつて来た。箸をおいて紙と筆とを取り上げた博士は

城山は暮れてしまひし簾の中

黙禪

若鮎ののぼりそめたる石手川

同

即吟二句を書き添えて、「久女さんも何かお書きなさい」と私へよこされた。妓が硯箱を私の前へもつてくる。私は公会堂で虚子先生が選して下さい。

卓の百合あまり香つよし疲れ居る

久女

と「芍薬や師に近く座も夜の宴」この即吟とを認めるのであった。

「私も城山をよみたかったです、先生がおよみになってしまひましたね」と私は黙禪博士に言つて振り返つた。城山はまっくら欄にかぶさつてゐた。

「あなたは疲れて仕合せでしたね、虚子先生が選つて下さつて」と博士は笑はれる。「折角こゝ迄来て、一句も先生から選られる句が書きなげれば、ほんとにがっかり致します。私はもう門司を出る船の中から夜とほし寝られないで疲れ切つて居たのですもの」と私も笑つた。

その時米千代が襖のかけから姿を現はした。そして笑みこぼれて、虚子先生のまん前へきて座つた。「まあ先生、しばらく

でゐらっしゃいましたね」かう言つてにっこり笑つた米千代は、年の頃二十六七、はつきりした丸顔で、齒切れのいゝ東京弁だつた。一座は大ていお馴染らしく、彼女がきたので急に明るく賑かになつた。虚子先生は手近な盃を彼女にさしながら、「君は相変らずかわいゝね。ちつとも以前と変らない。すこしやせがついて、一層別嬪になつたよ。あれからどうしたの？」などと此若い妓を相手にお話になつてゐる。

何事にも淫をのこすなと四、五年前先生のお書きになつたものゝ一句をふと思ひ出して、澄みとほつた無駄のない先生のお對話振を私はよこから伺つてゐた。「先生、私あれから暫く東京のお袋のところへ帰つてましたの、エ、神田の松住町でした。地震だとときとびっくりしちゃつてすぐ飛んで帰つたのですわ」「お袋は今どうしてゐるの?」「今度あつちへ帰つたら一度お袋をたづねて見やうか、君は親一人子一人なんだね」などと先生は米千代の話をうまくたぐり出しになる。

芸者といふ者は成程こうしたお座敷に必要なものだとは内心感心するかはら門司から高浜港へつく迄夜とほし老妓のしわがれ声でしゃあく下品なわるふざけをきかされ、若い妓達のだらしない甘たれ声で、苦しめられた事など思ひ出すのであつた。米千代はさっぱりして厭味がない。「虚子先生、私に一枚短冊をかいて下さいな」彼女はかういつて持参の短冊をふくさからとり出す。虚子先生は快よく受取つてお筆をひきき、暫くじつと考えておいでになつたが、やがてさらさらとおした

ゝめになって、「さあ君に上げやう」とお渡しになる。「ありがとうございます、ほんとうに」米千代はほんとに心から嬉しそだった。「米千代さん、一寸私も拝見させて下さいまし」私は彼女から短冊をかりて拝見する。

昔人来て芍薬の光ります

虚子

先生のお筆はのびくと感興のまゝに走ってゐた。「どれ私にも見せてごらん」と黙禪博士も私から受け取って、「芍薬の光りますがいゝですな」とお口の中でくりかへし眺め入ってゐられる。

私は単純に米千代が羨ましくなつて彼女にさう言った。「米千代さん、あなたほんとにお任せですね。こない、お句を書いて頂いて、せめて私にもあなたの任せをあやからして下さいな。ねえあなたの年と名でもよござんすからその残った短冊にかけて私に下さいましな。いゝでせう？、今度の記念にしますから。ねえ米千代さん」しかし彼女は妓の年をきく野暮な女客に只花やかに笑つてゐるばかりで、「私字なんか書けませんもの」と言つてゐる。「この人は九州からはるゝやうなもので、このだから書いてお上げよ」と虚子先生も笑つておすゝめになるけど彼女はとうとう筆をとろうとはしなかつた。

献酬がはじまる。虚子先生はお座をお立ちになり一人一人の處へお出になつて、御丁寧に盃をさゝれる。米千代さんにお給仕してもらつて私はお先に御飯を頂戴する事にした。

遂に虚子先生は私の處へもお座りになつて、お手づからサイ

ダーをついで下さつた。私はたゞ勿体なかつた。宴はて、虚子先生がお立ちになつた時、私も皆様へ御挨拶もそこへおあとを追つた。素月氏もお供される。あとの方々や米千代はどうなかつたか……？

馴れない御男子ばかりの御酒席から、やつとき放されたやうな心地がしてホツとした私は、お外套をかへて松山の一番賑かい一芝居やレストランなどのある町角に佇つて、素月さんがどこかの本屋に唐紙を買ひに走つて行かれた間、先生とお話して待つてゐた。先生は外套にお氣がつかれて御手にとつてしまはれた。それから素月さんと御一緒に道後ホテル迄お供した。三階の先生のお部屋の障子をあけると、二の間の衣桁の下に、鉄色がかつた（？）お能のお衣裳がみだれ箱にたゞまれてゐるのが先づ目につく。

たんぜんにお召替になつた先生は温泉にも召さず、すぐ揮毫の用意をおさせになるのだった。二の間の方へ毛布をしいて素月氏は紙をのべる。若い宿の婢が大硯をする。筆をとつて、一と息に。

山人の垣ねづたひや桜狩

虚子

のお句をお書き下ろしになつた先生は、山の字が大きくにじみ出すのを御覧になつて、「墨がうすい」と仰せ遊ばす。素月氏が婢にかわつてする。お邪魔にならぬ様、うしろにひかえてゐた私もしばらく磨らせていただいた。

かはりする墨まだ淡し青藤

久女

再び新しい紙がのべられる。素月氏が筆をお渡しする。先生は水のはしるやう何の渋滞もなく同じ句を書き流されたのち、先きのと見くらべておいでになった。「これはやめませう」と最初のを破ってしまはれた。それから十数枚の揮毫を忽ちおかきおへになった。

そこへまた来客。女中がお尋ねすると「こゝへ」と仰せになる。見知らぬ二人の俳人が通されてきた。それは松山在河野村の人達であった。虚子先生がお八つ迄お育ちになった河野村。

先年そこへ訪はれて、あの名高い

此松の下に竹めば露の我れ

虚子

といふお句を詠まれたそのあたりへ虚子句碑をたて度いといふ話し。明日先生にその村の俳句会へ御出席頂く時間のお打合せなどがあつた。

そこへまた先生の旧知の方らしい御婦人客のお名を婢が取次いでくる。それをも先生は「今夜お目にかかります」とお言はせになるのであつた。

朝からお疲れのところ、もう夜も更けるし私は素月氏と共に退出した。道後の町はもう皆戸をしめて淋しかった。宿を出ると素月氏と共に道後公園に出た。その葉桜には電灯が灯しつらねられて明るかった。けれどももう公園内は人通りもなく、のぼりつめた高台には茶店が一軒雨戸を入れかけてゐた。葉桜にまっさはな灯影がぬれたやうに冷たく流れてゐる。私は海のあなたの町へ二人の愛子をのこして来た旅人のさみしさをつく

ぐ感じた。公園を通りぬけた時は可なり夜も更けてゐる、坂下で俵屋を叩きおこして俵をやって下さつた素月氏にお別れしてから、長い暗い松山への一本街道を走りつゞける幌の中でも私は疲れを覚えつゞも頭は澄切つて小倉の事のみ考へ耽るのであつた。

以上が久女の紀行文であるが、その時の模様が詳しく述べられている。懇親会のあつた某一流料亭は二番町にあつた「梅の家」ではなかつたかと思われる。また、米千代という芸者は松山俳人の間では馴染らしく「葉桜」の他の記事の中にも出てくる。

この旅で久女が泊つたところは高橋家という家ではないかと思われる。それは大正十五年四月九日、素月に宛てた久女書信により推測できる。

山笑ふ及び桐一葉の選句大変延引いたしましてすみません。

丁度一年ごしに相成りました。山笑ふの方のせん句して、丁度あの松山行の時たづさえ旅中選をしかゝりしまゝ松山を出立に際し高橋家へ忘れて出立、その後ずつとたつてから送つていたぐさでしたが、例によつて多忙とすばらのため、延引にくゝをかさねました。

と記している。

次の来松は昭和二年四月三日の第一回関西俳句大会の時であるが、その前後の様子を知る久女書簡がある。素月が大会の計画を知らせたものに対する返事である。その頃の久女の様子もよく分

るので全文を掲げてみたい。

御手紙拝承いたしました。私は病気で一、二ヶ月ここへ転地にまゐつてますのでひとり毎日淋しく暮してます。お蔭様で大分よろしくなり来月はひきあげられると喜んでいます。当地へ来ましたけど、ひとりどこへも出ず、先日一寸久保さんが御見舞にきて下った位の事でどなたへも俳人におめにかかりませぬ、終日ひとり全くのひとりです、ひとりもいゝものとしみじく存じました。只ひとりであるといふばかりでなく精神的にもひとりばつちです。小春日和で散歩ばかりしてます。

さて、来年の御もやし(催)鬼が笑ふでせうが、私も昨年御一緒にまゐつた私の友(松山の故高橋氏の令嬢)がいま松山へおかへりになってますので、ぜひこい(と)いつもいってよこされませ。私の女の友としては一番といつてもよいその親しいお友達にあひに私もゆき度いとおもつてゐた所ですから、体のぐあいもよく家庭の方の都合もよかつたら十中八九迄ぜひ伺がひ、虚子先生にもおめにかゝり度くおもつて今からたのしみにしてます。

宿は松山道後町のその友一明比氏夫人といわれます、小倉で大きな産婦人科の病院をもつてゐられましたかたですーのおうちへとめていたゞき度くおもつてます。もし友がさしつかへなくば一友は御病氣ですから。いづれ来春拜眉の上にて。私も体さへよければ松山城のうつくしいわかばを見度いと願つてます、また健康がいささかきづかはれます。

黙禅様へもなにぶん、令夫人(お宅様の)へぜひおよろしく御申伝下さいませ。

(大正十五年)十二月十一日

久女拜

塩崎素月様

宛名は松山市一万町市設住宅二三号塩崎素月。発信は福岡市外箱崎町座毛の内、舟木氏かた、杉田久女。となつてゐる。

この頃も久女は病氣勝ちで箱崎へ転地療養に出掛けている。久保さんとあるのは久保より江で、唯一人久女を見舞つてゐることは親しい付き合ひであつたことがわかる。より江は九州帝大医学部教授久保猪之吉博士夫人で松山の出身であり、少女時代愚陀仏庵で子規・漱石に可愛がられた方である。

昭和二年四月三日の第一回関西俳句大会は道後湯之町公会堂

(現在の子規記念博物館の場所)で行われているが、この公会堂は新築中で、まだ落成前であつたものを岩崎町長の特別の計らいで使用させてもらつてゐる。国鉄が松山まで開通した式典の日でもあつたが、当日は雨で正午から始まつた会も選句の披稿にかかつた午後五時三十分頃は室内も暗く、電灯の設備が出来ていないためロソクを点けて採点を確かめたところ。

はじめは東大俳句会から水原秋桜子、高野素十なども来る予定であつたが都合が出来て不参加となり、東京からは高浜虚子、年尾、今井つる女夫妻、京阪神から田中王城、前田秋俊、北九州より吉岡禅寺洞、楠目橙黄子、日原方舟、杉田久女等、地元からは香坂一步知事、村上露月、野間叟柳、酒井黙禅などほとんどの県



昭和二年四月四日  
豊坂町 井上要氏邸にて

前田 五剣  
中村武夫郎  
今井 五郎  
榑目燈黄子  
高田 虚子  
酒井 黙神  
吉岡禅寺洞  
井上平一郎  
広野 孟逸  
日原 方舟  
高浜 年尾  
田中 王城  
高浜 育子  
今井つる女  
杉田 久女  
波多野晋平  
塩崎 素月

下排人が参集している。兼題「花」、席題「春雨」、久女も選者の一人であった。

翌四日も雨で虚子はじめ大家連の逗留で松山ホトトギス会臨時俳句会が豊坂町の井上邸で開かれ、久女はこれにも参加した。帰倉後十日ほどして素月、波留女宛に書簡をよこしている。

ずいぶん久しく御無沙汰申上げました。帰倉後また旅疲れもやすまらぬ翌々日に、杉田の国の舅がまゐり数日滞留いたしましたためいそがしく、漸く一昨日出立しましたのでほっとしました。

さて、此度は御言葉にあまへてまかりいで、いろ／＼とおこころこめた御もてなしにあづかり数日をおかけ様で殊にたのしく有益にすごしえられあつく御礼申上げます。

あなた様、久しい以前からの、いろ／＼の御準備にてさぞかし／＼おひとかたならぬお心づかひ遊ばしました事を、おさつし申上げます。而しあなた様が御仕事のかたわら、ひとかたならぬ御骨折の結果として、俳句大会も無事御盛況にて御終了、数ならぬ私共迄はる／＼御地へ伺ひ、虚子先生にもおめにかゝり、又、伊予の山河に再び接して数日をホウの世界にこもり暮せました嬉しさ何とおん礼申上げてよいかわかりませぬ。虚子先生のおとも申上げて子規子の髪塚へまゐりました時のこゝろもち、お宅へおとめいたゞいた夜の記憶、あの公園の花の雨の夜、あなた様がお一人／＼の前に盃をすゝめ嬉しげに酔っている時の御様子。などいろ／＼めにうかみますが、殊に出発

前夜、御親切に、おむかへ下さいまして、一夜のやどりを御夫婦様のおこころづくしで、心の中に感謝しつつ、暁の寒さにお二人でうば車をひいてお送り下さいましたお情け、その前夜御母君様の御情け、私は一々お礼の言葉もなく、たゞホ句のみにて、いしでむすばれた塩崎様御夫婦のおまごころを、いよの一夜を、松山の夜の思ひ出を、いつ迄もうれしいものとして、かきいだし思ひ出し、あなた様かたお二方を私の親しい方として持つことを私はあの夜から一層切にかんじとりました。うれしうございました。

素月様がお酒の御機嫌でかいて下さったお短冊、有りがたく永がくあの日の記念として保存致します。もう一つは忘れえぬ、奥様の御ゆかしいおこころづくし、お花のおたしなみ、ほんの時々のおあひ乍ら、何となく私のこころにしづかな、うるはしい印象をのこしました。あつく奥様にお礼申し上げます。どうぞまたの期には九州へお出かけて、ぜひ当地へも御来駕待上ます。また御二方様御丈夫で、おたのしく御仕合せにおくらし下さいませ。はる女様も御子様をそだて、御母君をいたはりたまひつつ折々御作句にいそしみ、御夫婦御田満におくらし、ここからいのり上げます。

尚末筆乍ら御母堂様にくれぐれもおよろしく仰せ伝願ひ度く、素月様の御ゆかいな御性格をつくぐ私は微笑して思ひ出し、今日の木のめ雨に松山の数日をなつかしく思ひ出されるのでした。

さてまた虚子先生の御短冊、熊本の木母寺氏にたのまれ一葉さし上げ度いのですが、一葉至急お送附下さいませんか。四円とか承りましたが、虚子氏の短冊の実価も共におしらせ願へれば甚だ幸甚です。

御句会前井上邸にてうつつして下さいましたし、やしん、お実費にておわけ下さればおよろこびです。又申しおくれましたが、子規せんべいありがたく煨倉後子供らとも喜びおいしく頂戴して居ます。誠に延引乍ら、こころ嬉しき御状のみを、乱筆にて。虚子氏の御短冊ぜひ至急御送附願上ます。

(昭和二年) 四月十四日

久女拜

塩崎素月様、はる女様

宛名は松山市一万市設住宅、塩崎素月、はる女。発信は小倉市堺町百十一、杉田久女、である。

久女が松山で虚子と共に正宗寺の子規居士の理髮塔に詣でたことは俳人としてこの上ない感激であつたらうし、帰宅しては子規せんべいの土産を子供たちと共に賞味しているのも興味深い。

この書簡で、四月三日は道後町高橋家へ、四日夜は素月宅へ一泊し、五日早朝松山を発つたものと思われる。高橋邸ほどの辺りであつたか判明しないが、素月居(葉松発行所)は現在勝山町二丁目(中一万)で、町並みはその当時のまま残っている。建物はずっかり変わっているが、筆者(当時小学生)の記憶では、一萬町市設住宅は中流サラリーマンの住宅で、居住者は旧制高校教授、二十二連隊の将校、中級会社員がいた。家の前はカワラケ堀とか

いった池があつて、そこで鮎などを釣つたことを覚えてゐる。池の向こうには六角堂が見えた。現在その池は埋め立てられて東雲遊園地となり、中村草田男の「夕桜城の石垣裾濃なる」の句碑が立っている。

久女と「葉桜」との関係は同人課題選者として廢刊号まで続くが、その間同志への寄稿も前記「虚子先生と芍薬」の外「遊女の句」「草城句集について」「英彦山より」「安徳帝の柳の御所跡にて」「古雛」などが残っている。

久女の松山への想いは葉桜発行所が宇和島へ移転した後まで続き、昭和七年三月十四日、塩崎波留女宛來信にも次のように書いてゐる。

前略、女中なしの上一週一度学校に絵をおしえにまゐらねばならず、毎日手紙の返事と俳句のしごと忙殺され、殆ど寸暇なき日を暮して居ります。三月三日「花衣」創刊号のうら表紙に雛の絵をかきましたのも女の節句にちなみしたので、私お節句のくる度に数年前の松山の旅を思ひ出し、かつあの時、城下町の古道具のせり市でもとめた古雛をかざります。あの夜明、御親切に見送つて下さつたあなた方御夫婦の御心あつておもてなしを思ひ、うららかな南国の町をしきりになつかしく思ひ起します、と同時にその旅でおめもじ申上げた虚子先生の御温顔をなつかしく思ひうかめます。拙い句なのですけれど、その古雛をめの前にかざりまして。

古雛やかかねあせたる刺繡の袖

久女

子規おもふ湯町の産や古びいな  
同  
髪そぎし天平がほの古びいな  
同

來信の宛名は伊予宇和島市大石町、葉桜発行所、塩崎波留女、発信は小倉市富野菊ヶ丘杉田久女。となつてゐる。

久女はいつまでも松山のこと忘れられなかつたものであろう。芍薬の美しかった松山城、子規居士のふるさとを想い浮かべてゐる。久女と松山はこのような俳縁によつて結ばれてゐたように思う。

(昭和六十三年五月例会講演) (松山子規会幹事)

## 新刊

松山子規会叢書 21

子規  
漱石  
写真ものがたり

風戸 始著 松山子規会発行

A5版 二四六ページ

定価 二、〇〇〇円 送料 三五〇円

松山子規会

振替 徳島二一八六八

# 若き日の秋山真之と明治の海軍

松尾忠博

秋山真之の伝記を見ても、青年時代のことについては、ごくわずかしか書かれていない。ことに、海軍兵学校を卒業してから、アメリカ留学までの間については、一部を除いてまったく空白の観がする。彼の海軍の奉職経歴書を参照しても同様である。ただ、彼が勤務した軍艦の行動などは明確になっているので、その辺りから少しく迫ってみたい。

## ○少尉候補生としての練習遠洋航海

秋山真之が海軍兵学校を卒業したのは、明治二十三年（一八九〇）七月十七日のことで、同日付けで海軍少尉候補生を命ぜられた。彼は首席卒業であったから、練習艦隊旗艦の「比叡」乗り組みとなった。この発令関係については、同年七月二十六日付け官報第二一二二号で見ることが出来る。総員八十六名のうち卒業成績の奇数席次の者が軍艦比叡に乗り組み、偶数席次の者が軍艦金剛に乗り組みを命じられた。海軍兵学校の卒業成績は、このように官報で発表されるので、官報さえ見れば一見してそれが判明するといふ、いささか厳しすぎるものであった。同日の官報によると、愛媛県出身者の山路一善少尉候補生は三番の成績であるのが

分かる。この海軍兵学校第十七期は二名の優等生を出しているが、彼は三番であったから惜しくも優等をのがしたことになる。秋山真之は大学予備門を退学してからの入学であったから、もしそれが無ければ山路一善も優等生になれたであろうに残念なことであらう。

それはさておき、彼ら少尉候補生は練習艦隊の比叡及び金剛に乗り組み、日本沿岸を練習航海中であつたが、トルコ国軍艦エルト・グロール号が和歌山県下南端大島の檜野埼燈台下の岩礁に乗り上げて沈没し、乗組員五百三十八名が死亡するという事件があつた。政府は明治二十三年九月二十七日、たまたま横須賀に停泊中であつた練習艦隊に対し、生存者を両艦で護送しよう命じた。もちろん、少尉候補生らの実地練習を兼ねるのであつたが、両艦は直ちに遠洋航海の準備をなし、神戸へ向かつた。

神戸には、生存者六十九名が待機していた。まず比叡には士官三名、准士官一名、下士官兵三十名を、残り三十五名は金剛に分乗させた。<sup>1)</sup>

もっとも、比叡といふ金剛といつても、いずれも初代である。比叡は明治十一年二月、英国のミルホード・ヘヴン社で竣工し

た鉄骨木皮のコルベット艦で、排水量二二四八トン、長さ七〇メートル、二千五百馬力の機関を備え、速力一三ノット、三本マストのバーク型の帆走設備をもち、もう一隻の練習艦金剛と全く同形艦であった。ただ、金剛は同じ英国製でも、ハルマールス社での製造であった。そして、エンジンも若干は異なり、その速力は一二・二ノットであった。しかし、外形ではちよつと見たところ区別がつかない程度であった。<sup>2)</sup>

ところで、この二隻の軍艦は伊予とは縁が深い。秋山真之が乗り組む少し前、すなわち明治二十三年三月十四日まで、廣瀬武夫少尉は比叡分隊長として勤務していた。彼は後に旅順港閉塞隊長の一人として、偉名を馳せることとなるが当時少尉であった。海軍兵学校では、秋山候補生の二年先輩で、すでに交流があり、彼が少尉任官後も互いにいききがあった。

次に、金剛には、明治二十五年十一月三十日松山市興居島沖で不運にも英国商船と衝突沈没した軍艦千島の軍医長佐々木文蔚が、ついこの年の三月まで乗り組んで、前年の海軍兵学校卒業生の遠洋航海に出ていたからである。両者ともすでに配置替えとなつてはいたが、何か偶然ならざるものを感じる。

このトルコ海軍のエルト・グロール号の生存者の護送については、トルコと利害関係のあるドイツ・ロシアからも護送の申し出があったが、日本がこれを護送することになつたのである。もともと、エルト・グロール号はトルコ海軍兵学校の卒業生の練習航海を兼ね親善のため日本へ派遣して来たものであった。この軍艦

にはエミド・オスマン・ベイ海軍少将が親善使節として乗り組んでおり、同使節は明治天皇に拝賜して、トルコ国最高のダイヤモンド大勲位勲章および国書を捧呈し、日本国民から歓迎を受けていた。したがって、わが国が丁重に遭難者たちを送り帰すのは当然のことであつた。

こうした不幸は早くから指摘されており、古い船体であるところから、十分に修理のうえ帰国するよう、その筋の人々から忠告していたといわれる。誠に不幸なことにそれが的中したのは残念であつた。ちなみにエルト・グロール号の諸元は次のとおりであつた。一八五四年イスタンブール造船所で建造され、排水量二三四四トン、長さ七六メートル、六百馬力の補助機関を備え、速力一〇ノット、三本マストのシップ型の木造帆船であつた。当時すでに船齡三十五年の老朽船であつた。

同年十月十一日午前二時に神戸を出港し、スエズ運河をへて、十二月二十七日バシカ・ベイでトルコ海軍にこれら生存者を引き渡している。当時トルコ国の国情は誠に複雑で、クリミア戦争の後一八五六年にパリ条約が締結されて以来、他国の軍艦はダーダネルズ海峡は通過出来ないこととなつていた。せつかくはるばるトルコ国まで護送しながらコンスタンチノーブルに入港できないのであつた。しかし、その後皇帝陛下の特別の計らいで明治二十四年一月二日コンスタンチノーブルに入港した。同月五日比叡艦長田中綱常大佐は士官十数名と共に皇帝陛下に謁見している。そして約一カ月の滞在の後、二月十日トルコ発帰途についた。<sup>3)</sup>

この間に、秋山候補生はトルコ国皇帝陛下から、救難章を贈与されている。秋山真之の海軍奉職経歴書によれば、「明治二十四年五月二十三日土耳其国皇帝陛下贈与救難章受領雇用允許」と記されている。この表現から見ると、少なくとも少尉候補生以上にはすべて贈与されたのであろう。日本にはこれに相当する勳章・記章はないが、強いていえば帝国水難救済会特別会員章であろうか。あるいは紅綬褒章であるかも知れない。ただし、海難の急迫した情勢の中で救助したのではないから、紅綬褒章はやや無理な感じがする。

秋山候補生は、練習航海の初期段階において、このような名誉を受けるという、滑り出しは誠に好調そのものであった。

さきにも述べたとおり、一か月にわたってトルコ国に滞在したわけであるが、ただ単に観光に日々を費していたわけではない。水交社発行の雑誌「水交社記事」によれば、トルコ国海軍事情の調査はもちろんのこと、風俗習慣などもかなり詳しく調査研究している。したがって、秋山真之も又これらのいずれにかかわっていたと思われる。

そして、帰国に際しては、トルコ国皇帝陛下から明治天皇に対し

### 腐敗糧食品類別表<sup>5)</sup>

備考 受込場ノ記載ナキモノハ従前本艦ニ搭載セシモノニシテ其積込年月日ヲ詳ニセズ

品名	装置	一罐容量	罐数	貫量	受入月日	腐敗発見年月日	艦内格納所	受込場所
ボイルドビーフ	罐詰	貳斤	四七	一〇貫二八〇目	廿三年八月廿一日	廿三年十月七日	艦尾コックピット倉庫	吳主計部

て、馬二頭を贈与された。この馬の管理のため、トルコ国皇帝陛下侍中陸軍騎兵大尉メーメット・ムーラーペーハが付き添った。

### ○遠洋航海の労苦と糧食

明治十年代から二十年前半にかけての遠洋航海は労苦の連続であった。軍艦の造りや構造にしても、まだ鉄船は少なく、動力に頼るよりは帆に頼っているわけであるから、嵐ともなれば実に大変な危険と労力を要した。しかし、それにも増していつも何かを実験している航海であった。例えば、軍艦比叡及び金剛の前の航海では、後に軍艦千島の軍医長となる佐々木文蔚大軍医（後の軍医大尉）が金剛の軍医長として勤務していたが、遠洋航海のための糧食の保存状態を詳細に研究している。ハワイ諸島・ニュージーランド・豪州など熱帯地方への長期にわたる航海では、冷蔵施設のないこの当時は特に苦心しているが、なお、よい結果を得るに至っていない。今回のトルコ行きについてもその点は全く同様であった。次にかかせる「腐敗糧食品別類別表」に見られるとおり、多くの品物が腐敗し廃棄しているのが分かる。





る。

以上かなり長く引用したが、この当時の海軍軍人は、予想に反して、極めて質素な制約の多い状況のもとに食生活をおくっていることが理解されれば、筆者の意図は満されるものと思つてゐる。

#### ○天皇陛下への拝謁と賢所への参拜

話は以前に遡るが、海軍兵学校を終えて練習航海に出る場合、その練習艦隊の少尉候補生（奉任待遇）以上の士官あるいは各科候補生は天皇陛下の拝謁を賜わるのが例であった。そして、拝謁のあと賢所へ参拜を仰せ付けられるのである。それらの軍艦の准士官及び下士官については拝謁はなく、賢所への参拜のみを仰せ付けられたものである。当時は軍人のみではなく一般の文官であっても、高等文官もしくはその試補（奉任待遇）もまた同様に、外国へ派遣される場合は同じく天皇陛下の拝謁があり、続いて賢所へ参拜したものであった。このことは官報の「宮廷録事」欄に掲載されているので容易に確認することができる。

秋山真之が最初に拝謁を賜つたのがいつであったかは不明であるが、このトルコ行きに際しては次のとおり官報第二一八〇号（明治二十三年十月三日付け）に記載がある。

#### ○宮廷録事

○内謁見、拝謁並賢所参拜 昨二日午前十時露西亜国特命全權公使デミトリ・シエーウキチハ参内内謁見仰付ケラレ尋テ仏

国ヨリ帰朝ノ内閣官報局長高橋健三八拝謁仰付ケラレ英仏独國へ派遣ノ海軍大尉内田善太郎、軍艦比叡、金剛ニ乗組ミ土耳其國ニ向ヒ解纜ノ海軍大佐田中綱常、同日高壮之丞、（中略）海軍少尉候補生真田鶴松（中略）、秋山真之、同田所廣海（中略）ハ孰モ拝謁並ニ賢所参拜仰付ケラレ及同上ノ海軍上等兵曹前田新助外四十五人ハ賢所参拜仰付ケラレタリ

なお、ちなみに海軍大佐田中綱常は比叡艦長、同日高壮之丞は金剛艦長である。海軍大尉内田善太郎は翌二十四年一月十九日付けで海軍少佐に進級し、かつ造兵監督官に任命され、英仏独へ出張を命ぜられている。拝謁を仰せ付けられ参内した日付けと発令月日が逆転しているが、これは発令庁の違いによるものである。彼は松山にも縁のある軍人で、やがて軍艦千島の備砲の据え付けの際には直接かわりを持つことになる。しかし、今はそれは主題でないのでこのままとする。

練習艦隊とはいえ、比叡・金剛二艦の下士官以上ともなれば、人数も多いので二度に分けて拝謁および賢所参拜を行っている。クラスヘッドである秋山真之は、もちろん上記のとおり第一回目の参内に属していた。ここで誠に気の毒なのは山路一善候補生である。卒業成績が三番であったため、第二回参内組の分に振り分けられている。翌三日の筆頭参内者は高知出身で後に海軍中将まで昇進し、かつ男爵まで授かった内田正敏海軍少佐（金剛副長）であった。

トルコから任務を果たして無事帰国した秋山少尉候補生らは、再び第一回拝謁組として明治二十五年五月二十七日に、そして山路一善少尉候補生は同二十九日第二陣として拝謁を賜わっている。もちろんそれぞれ賢所参拝については前回同様であったことはいうまでもない。

### ○軍艦吉野回航委員としての秋山少尉

明治二十五年五月二十三日秋山真之は海軍少尉に任官した。同級生八十八名の内二十名がトップを切って海軍少尉になった。そして、明治二十六年六月一日付けを以て英国において製造の軍艦吉野回航委員となり、英国へ出張することになった。

この回航委員には、海軍兵学校の同期生である、前出の田所廣海海軍少尉もまた同じく任命された。彼は秋山真之と同じく優等生で、二番の席次でもあり、その後も常につきかず離れず行動を共にしている。彼は隣県である高知出身であった。同年六月二十二日トルコ国への出発の時と同様に拝謁仰せ付けられ、賢所へも参拝のうえ、六月二十九日東京新橋を午前八時五十五分発の汽車で出発している。中牟田軍令部長以下数百名の歓呼の声のうちに送られた。横浜で昼食をとり正午西波止場よりカルマル・ゼンシヤイヤ号に搭乗し、壮図についている。

横浜―上海―福州―香港―シンガポール―アデン―ポートサイド―ロンドン―ニューカッスル(タイン河畔エルジック造船所内(係留軍艦吉野))がその経路である。

到着したのは同年八月三十一日午前十一時三十分のことであった。航程二万二千三百九十八海里、航行日数四十九日、碇泊日数十四日であった。

### 送秋山真之英国行

暑い日は思ひ出せよふじの山

子規

そして、明治三十年アメリカ留学の際には

### 送秋山真之米国行

君を送りて思ふことあり蚊帳に泣く

子規

と詠んでいるが、これは正しく健康状態の差なのであろう。吉野回航の時は同じ羨むにしても、まだ余裕があるが、真之の米国行きはさすがに深い衝撃をうけたのであろう。

ともかく、吉野回航委員としての彼はもう二度目の洋行で、しかも、商船での航海であつてみれば、比較的楽な航海であつたと思われる。しかし、回航委員はいずれの時も同様であるが、全く遊んでいるわけではない。船内日課が作成され、事業は午前が坐学、午後が実業となつているのが通例であつた。坐学は運用術・砲術・機関学及び算術で、実業は体操・生兵体操・手旗信号・溺死者救助法及び止血法であつた。したがって、士官は教官となつて下士官・兵を教育にあつた。もちろん初級士官は自分自身も教育を受けるので、その点は多忙であつたろう。かくして、軍艦吉野は明治二十六年十一月二十六日英国を出発、翌年三月九日呉軍港に到着した。軍艦吉野艦長河原要一大佐は、同年一月三十一

日、他の士官たちを具して宮中へ参内拜謁を得、賢所へ参拝した。この宮中録事の中には、秋山・田所両少尉の名は見出だすことができない。第二陣として参内したものと思われる。

#### ○その後の秋山真之

明治三十年には米國へ留学したが、この期間の動静については、島田謹二氏の著書「アメリカにおける秋山真之」に詳しいので省きたい。ただ、この留学の前後における廣瀬武夫との交遊については興味深いものがある。もはや紙数がないので、これは他日に譲ることとする。廣瀬武夫とは海軍兵学校時代からの親友で、秋山真之が英國へ行き公使館付武官として勤務中も、ペテルブルグ在勤の廣瀬武夫と何度か会って旅行もしているので興味あるテーマとなっている。

著書の少ない秋山真之に対して、極めて多くの資料を残した、そして極めてロマンに満ちた生涯を送った廣瀬武夫については、いずれ取り上げねばならないものと考えている。

#### ○海軍武官の階級と服制

秋山真之が海軍兵学校へ入学した明治十九年には、海軍中佐と海軍中尉の廃止があった。これは英國の制度にならったもので、明治三十年に復活されるまで中佐、中尉の階級はない。秋山真之の履歴を見ても、中尉に進級せず、明治二十九年十月二十九日大尉に進んでいる。階級についても終戦時とはかなり異なっており、

下士卒についても看護兵が看病夫となっている。主計兵は厨夫。工作兵も鍛冶・工夫・木工の三種に分かれており、機関兵も火夫と称していた。准士官も上等兵曹・船匠師・機関師の名称である。ことに上等兵曹は後に兵曹長の名称で広く知られるものであるが、当時は特務士官制度のないころであり、現在の准士官よりも余程上位の感がする。

秋山真之の参謀飾緒姿の写真（冬服）を見ると襟章がないのに気が付かれるはずであるが、この階級襟章が付されたのは彼の死後大正八年の改正からであるから当然のことである。なお、下士官はすべて庇付き帽子ひかけぼうしを着用するのでなく、二等兵曹以上に限り着用し、三等兵曹は水兵と同じ帽子であったことなども申し添えておきたい。

註(1) 海難史話（海文堂昭54）

(2) 写真日本軍艦史（今日の話題社昭58）

(3) 近世帝國海軍史要（原書房昭56）

(4) 東奥義塾学友通信（明治23・9・25外）

(5) 水交社記事（明治24・3外）

(6) 水交社記事（明治26・）

(7) 日本の軍服（図書刊行会昭55）

（昭和六十三年七月例会講演）（松山子規会云負）

# 興居島の誹諧 — 田村三代 —

白 田 三 雅

一 はじめに

伊都松山の海の玄関口、高浜港の正面に横たわる興居島は、かつて忽那七島に属し、伊予水軍の根拠地の一つであった。島の中に、伊予の小富士と称せられる小山があり、それを廻る丘には、一面にみかん・枇杷・キウイフルーツなどが栽培せられる、静かな農漁村である。この島には、慶長のころ、鷲ヶ巣に上陸した七軒とも一七軒ともいわれる人々の一族が暮らしているが、なかでも寛永初年に没した小池内蔵之進の子孫は、紀州新宮の領主であった堀内主水正の後裔であるといひ、二代以降は堀内姓を名乗り、以来、庄屋兼郷土として由良地区に君臨して来た。この親類にあたる田村氏も、代々庄屋格として堀内氏をたすけ、地区の発展に尽くしている。

この地に文化の花が開くのは、幕末、寛政期（一七九〇）以降のことである。庄屋の堀内三陵（明和四年～天保一四年六月一七日、一七六七～一八四三、通称喜佐平、諱は長郷、号松陰）は、国学・歌道に長じ、家塾に子弟を教えたようである、これからふれる田村由良雄も、彼の教を受けたと思われる。

二 田村由良雄

この地に俳諧がめばえたのは、栗田樗堂（寛延二年～文化二一年八月二一日、一七四九～一八一四、通称専助、諱は政徳又は政範、号を蘭之・息隠、加藤晁台（子規をして、近代第一の俳人と言わせた）に学んだとされる。田村由良雄（？～明治二年二月五日、？～一八六九、通称利左衛門、諱兼信、号由良雄、庄屋格）にはじまる。しかし、彼はその生年は不明であるが、父園右衛門の生没年から推測すると、寛政の中ごろ（一八九五）の生まれのようである。樗堂に学んだのも、その一五～二〇歳のころと思われるのである。これを記するものとしては、樗堂の扇面や、同門であった黒田白年（安永五年～天保一〇年二月三日、一七六六～一八三九、通称与惣兵衛、号古井庵、菓種商）、豊田故文（生没年不詳、髮結業、松前町）、西坡（生没年不詳、和氣の人、号八尺庵、『うきよ草紙』所載、御手洗の人とも、樗堂ころ）などがあり、また、その交遊の広さを示すものとしては、成田蒼虬（宝暦一年～天保一三年、一七六一～一八四二、高桑蘭更門、金沢人、元加賀藩士、南無庵・対堂庵、門下に長谷部映門、岩城蟾居がいる）、田川鳳朗（宝暦二年～弘化二年、一七六二～一八四五、鈴木道彦門、熊本人、江戸住、号鶯笠・自然堂、奥平鶯居の

師)、桜井梅室(明治六年〜嘉永五年、一七六九〜一八五二、高桑蘭更門、加賀の人、諸国を歴遊、号方圓齋・素心、内海淡節・大原其戎の師)、松井梅左(生没年不詳、通称河内屋茂兵衛、大阪人、鈴木道彦門、無為庵と号し、天保一〇年『俳諧四国集』を校した人)などの短冊が遺宅に残されている。その風狂の広さ、深さがうかがえるが、残念なことは、当主の留守中、心ない業者の手により、多くの遺品が散逸したことである。しかし、筆者の数度にわたる訪問により、残されたものは大切にせられ、目下整理中である。その中から、最近、其角(?)署名の文台(文机)が発見せられ、目下研究中であることを書き添えておく。

次に所蔵品の一部を記しておく。

秋の夜のおくれは思ふ夕かな

杖にすかりて山寺に遊ぶ

名月やうすくらかりの佛達

山吹や雪の積木となりけり

春の海気なかき鶴の見やうかな

梅さくや持たかりほひて有なから

二階から釣瓶井りと夏の月

なお、国学に優れた堀内三凌の關係からと思われるものに、立本舎で教えた、田内董史(寛政一二年二月二四日〜弘化四年一月二七日、一七九九〜一八四七、通称求馬)や、家老の菅良史(天明六年〜安政五年九月九日、一七八六〜一八五七、通称五郎左衛門、弾正、号南台)の短冊もある。次に掲げてみる。

待子規

ものおもふと人やとるらんほととぎす

はつ音聞きつゝおもひしあかさば(や)

三 田村青樹

良史

由良雄のあとを継いだのは、通称園平、諱長暢(天保元年一月二八日〜明治三九年七月一七日、一八三〇〜一九〇六、号青樹)である。彼は、松山小唐人町門九深(寛政元年〜嘉永三年七月二三日、一七八九・一八五〇、久平、商人、奇行家で画をよくした)の二男として生まれ、祖父園右衛門豫信(安永四年〜嘉永六年、一七七五〜一八五三)の養子となったものである。彼は、從來、大原其戎(文化九年五月一日〜明治二二年四月一日、一八一〜一八八九、通称沢右衛門、号四時園)の門下といわれ、大野岬歩先生所蔵の『俳諧三十六雅』にも肖像句が載せられている。にかかわらず、遺宅には其戎關係が一点もなく、八木芹舎の選句帳や、其戎同門の内海淡節(文化九年六月〜明治七年六月七日、一八一〇〜一八七四、通称愛之丞、松山藩士、相応軒)の選句帳や歌仙があり、淡節の養子良大(天保五年〜明治二五年九月一日、一八三四〜一八九二、号緑天居・芭蕉堂七世、のち東京で活躍)、高部可等(文化一〇年〜明治二四年五月二日、一八一三〜一八九一、通称市兵衛又は仲太、鶯居同門)、奥平鶯居(文化六年三月一七日〜明治二三年八月二五日、一八〇九〜一八九〇、諱貞臣、通称弾正、又は山城、別号梅滴、家老、田川鳳朗門)などとの交流が認められる。なお、宇都宮丹晴(文政五年六月二五日

明治四二年八月二十四日、一八二二〜一九〇九、通称柳三郎、別号夢大、丹騎鶴、二番町住、子規と歌仙を巻いた人、牧野梅暁（弘化二年〜明治四三年五月二六日、一八四五〜一九一〇、通称光太郎、松山藩士、のち官公吏）、森石山（明治二四年ころ広島より伊予郡八倉に住む、号守中庵、郡中に糧糒社を経営、明治三一年ごろ没、通称義朗）などとの風交がみられる。以下それらの作品を掲げてみよう。

飛梅や鯉のはねたる水の音

朝かけや青田をめくる水のおと

還暦を賀祝寿

若かへる千代のみとりや竹の春

七十の君を祝ふに我又六十に余る

九ツなれば後を遂ふ亭

似しとしの君に親しくおもふかな

ともに遊ばむ千年経ぬま伝

日の遠き午睡の床や風の来る

輝きは唇にさへ有二月月

明治九年三月三十一日てふ日田村桃陽君の生給へる

大郎子の目出度さは曾孫と愛さるあり孫とよるこへ

るなり初子とそだつるなり

来合せし名付けの酒や桃の花

四 田村桃陽

青樹の長男桃陽（安政元年八月一六日〜昭和三年七月三二日、

一八五四〜一九二八、初名八太郎、のち元右衛門、昌八郎、諱為

信、号碧水園又は晴耕園、桃下・光風とも号す）は、同郷の堀内

匡平（文政七年八月二四日〜明治一六年一月一〇日、一八二四〜

一八八二、通称寛左衛門、号桑崖又は看雲、国学・歌道をよくし、

維新の風雲に尊皇を唱え、玉井春枝、三輪田兄弟と交わり活躍

のち、家塾に教えた）に学んで詩をよくしたが、また、父青樹に

従い俳諧を嗜んだ。彼の選んだ句集に『梅花集』乾・坤・後編

の三巻があるほか、三嶺（生没年等不詳）との歌仙十余巻、漢詩

稿などがある。また、風交の人々には、義弟の村上露月翁をはじめ

め、とくに一宿佛海（慶応四年二月二五日〜昭和二〇年一月二

六日、一八六八〜一九四五、正宗寺住職、のち妙心寺に出世して

臨済を研究、子規の友人、別号達磨堂）、森松南（生没年不詳、

子規の学友、名は知之、陸軍大佐、のち道後町長、詩画に長じた）

などがある。次にあげておく。

菊といふよきもの、咲九月哉

秋のくれ清水の鬼の出る噂さ

海山かけて立かへる春

時雨さぬいざ香たかむ魂迎

ここでちょっと注目されるのは、遺宅に数多く残された一宿の

書や画であり、書判の「与」も、一と宿の冠で作られたと記され、

今後の研究にまちたいと思う。

さて、桃陽は、幕末のころ、庄屋格として海防に召出されたが、

維新後は、学務委員として教育の普及に尽くし、さらに、村議や

梅暁

良大

青樹

丹靖

淡節

石山

可等

桃陽

一宿

仏海

三嶺

農会長として公共のために尽力した。とくに果樹振興には全精力を傾注した。彼は明治九年、農商務省委託のリンゴを庭先に植えたが、明治一四年、東京で開かれた内国勸業博覧会を見学し、青森産リンゴの見事さに驚き、早速苗木を注文し、帰村すると、山林を開墾、毎年開墾と苗木の導入をくり返し、リンゴはもちろん、枇杷・桃・夏柑・穴戸みかん（伊予柑）の試作と更新を続け、適品種の選抜を行い、漸く明治二七年に至って収入を得ることとなる。今日の県産品は、実に彼の苦心経営の結果ともいえる。かくて収入を得るや、村民にその有利を説いて普及に努めた。ここではまずリンゴで成功し、それが綿虫の被害で駄目になると、枇杷・桃、さらに戦後はみかん・いよ柑と発展するが、そのすべては彼の研究が基底にあつたのである。やがて、日露戦後は、傷病兵やロシア人捕虜の栄養源として陸軍及び日赤病院から注目せられ、納入を求められている。これらのことは彼の遺した『晴耕園史』に詳述されており、その功績は忘れることは出来ない。やがて、彼の努力は世人の知るところとなり、南は九州、関東各地より毎年視察者が訪れるようになる。このことも訪問者名簿二冊に評記せられており、中には、霽月翁をはじめ、南川会の指導者森河北、西園寺源透など多くが記されている。

彼の地域農業振興に果たした役割は特筆されてよいと思うのである。

五 その他の人々

イ 田村桑竹

桃陽の弟安八郎は、別家して港町三丁目に魁屋という小間物店を営んだが、彼も父祖と同じく俳句に親しんで桑竹と号した。また、漢詩も嗜んで井雪と号し、その遺墨も次のように残されている。

月に日にさかふる幾久のさかり哉

桑竹

千江有水千江月 萬里無雪萬里天

井雪

ロ 村上青峰

桃陽の妹タケヨ（明治一二年九月五日）、一八七八、明治二六年六月七日村上平太郎（霽月）に嫁すも俳句を嗜み、今出吟社で活躍した。

桃咲て五十年忌や母の顔

青峰

ハ 田村春岬

桃陽の長男晴太郎（明治九年三月六日、明治四三年七月一日、一八七六一一九一〇、春岬？）は才筆にすぐれ、将来を囑望されたが、肺患で若くして没した。今遺宅にはその遺作が残されているが、多分晴太郎は春岬と号したものと思われる。

一葉知る木の葉も今日の手向成

春岬

六 その他の人々

イ 田村良次郎

桃陽の三男良次郎（明治一九年一月六日、大正二二年九月一日、一八八六一一九二三、貿易会社員、松商第一回生）は、対米貿易に従い、ニューヨークなどで活躍していたが、惜しくも横浜で関東大震災に罹災、腕時計一箇を残したのみである。

口 田村岱東

桃陽の四男米次郎（明治二四年四月二六日、一八九一、松商第四回生）は、兄良次郎とともに、祖母の実家和泉儀平（通称いづぎ）に下宿したという。彼は、岱東と号して俳句を嗜み、松商卒業後、勸業銀行に勤め、森河北の娘菊と結婚した。

八 田村彌太郎

桃陽の弟、安八郎の長男彌太郎は、松商第四回生で、良次郎兄弟とけんか仲間であったが、やがて上京し、化粧品業を営み成功、戦前、母校松商に百万円の寄附をしたという。

なお、桃陽の後は、六男恵次郎（明治二八年八月二一日、一八九五）が継いだ。

さて、このほかに経歴不詳の次の短冊があるが、今後の研究にまらしたい。

春永朗

ゆるくと青みて柳をさくし

赤丸

伊勢の宗廟に詣でしをり

加羅くと蛙なく也五十鈴川

幸岳

竹の子や傘所の地面も憚からず

杜叟

眉の霜しら菊の露相對す

春洞

六 むすび

田村氏の俳系を見てくるうち、彼等をめぐって、小富士連という俳句会も浮かんで来たが、ここでは触れない。また、今回、稿を起すにあたって、田村豊八郎氏、子規会々長越智二良先生、

足立修平先生に貴重なお教えをいただき、また、資料も数多く拝見した。不敏の故にかえって多くの方々にご迷惑をかけたことと思われるが、ここでお詫びするとともに、ご叱正をお願いしてこの稿を終わりたい。

既刊

松山子規会叢書 15

子規遺芳——松山子規会史——

二八五ページ 一、五〇〇円

松山子規会双書 19

子規敬慕——松山子規会例会講演——

二六〇ページ 一、五〇〇円

いずれも送料二五〇円（二冊で三〇〇円）

松山子規会

振替 徳島二一八六八

# 一遍と子規（つづき）

越 智 通 敏

一遍が「信といふはまかすとよむなり」というとき、それは「法にまかす」ということであり、空也の「天運にまかす」、古湛禪師の「天然に任す」という意味であります。普通に言う「信ずる」といえば自我が残るし、「捨てる」と言っても捨てる主体が残ります。すると、一遍の歌にあるように、「捨てる心をも捨てる」と、無限に捨てるを重ねていかなければなりません。そこで、自力でも他力でもない境地を「信す」といったもので、「任す」、「まかに」、良寛のいう「任運」・「随缘」（良寛詩集）に通じます。

すなわち、「自然のままに」であり、これをさらに文芸的表現をすれば、一遍の「花の事ははなにとへ、紫雲のことは紫雲にとへ」ということになりましたが、これは芭蕉の「松の事は松に習へ、竹の事は竹に習へ」（土芳「三冊子」）と同じで、中国の言葉が源であります。

子規の俳論の基礎は自然のままをうつすということですが、これが写生論の出発にはかたまりません。そしてその前提となるのが、さまざまの自然、価値の多様性、仏教という諸法実相であります。

ここで初めにもどりまして、一遍と子規の直接関係を示すもう

一つのこと、それは連歌の発句として『菟玖波集』に載っている一遍の句

郭公なかね初音ぞ珍らしき

に子規が注目していることです。すなわち、『類聚書屋俳話』の中で、「時鳥」という項目を立て、時鳥に寄せる子規の感懐を、

「あはれ果報なる鳥よ。な的一声は命にもかへて聞かんことを思はれ」と述べたあと、古今の連歌と俳諧の発句の中から代表的なもの十数首をあげたうちの冒頭の句が一遍のこの句であります。ただし、ここでは「時鳥なかね初音ぞめづらしき」となって、表記に異動があります。

菟玖波集は、わが国最初の連歌集で、その成立は文和五年（一三五六）、一遍歿後六十七年目にあたります。ということは、一遍が連歌の上で名が知られていて、時衆の中でも行われていたとみてよいでしょう。一遍が土御門入道前内大臣と交わした歌が一遍聖絵に見えますが、これに限らず、あの一所不住の遊行の中で、宮廷の人々や高僧、連歌師などと歌を交わしたことがわかります。菟玖波集につづく代表的なものは『新撰菟玖波集』（明応三年、一四九四）で、編者宗祇（文龜二年、一五〇二没）は漂泊の歌人、

連歌師中最高の人に付与される称号「花の本」を与えられていた。一遍より一〇〇年以上後の人ですが、一遍に帰信した連歌師に「花のものと教願」という人がありました。京都で一遍と結縁したあと、山陽道を下る一遍に四十八日間随行し、備中輕部かるべの宿で亡くなりましたが、死の床で一遍と和歌を交わし、清純な心で死んでゆきました。ちなみに、「花のもと」というのは、桜の花の下で行なった連歌の会の指導者に与えられた称号なのです。一遍は、当代一流の連歌師と交わっていたわけです。一遍の後の時衆の中で連歌が盛んであったこと、宝厳寺を中心に、この土地でも連歌が盛んに行われ、大三島の神に奉納されたことは、和田先生のご研究によって明かにされています。

宗祇は漂泊の歌人でした。代表的な漂泊の歌人を時代順にあげると、古代末期から中世初頭にかけての隠遁的な歌人西行があり、中世初期に一遍、後期に宗祇、近世では芭蕉そして良寛となります。どうか。一遍が西行の歌を知っていたことは、「白川の関」で詠んだ西行の歌が聖絵に出てくることでわかります。良寛は西行を思慕し、和歌でも晩年の万葉調の歌に入るまで西行の歌に傾倒していました。その他では、これら漂泊の歌人双互間の関係は稀薄ですが、漂泊の歌人としては、西行―一遍―宗祇―芭蕉―良寛とあげることができます。これまで、文学史上、一遍を除く他の歌人についてはこのことは認められています。が、残念ながら一遍の歌はまだ評価されていません。しかし、時衆という集団と共に生涯を遊行に果てた一遍には、自然と人間の中に融合した歌に見

るべきものがあります。また、ともすれば道歌的になりやすい「こころ」の歌に、「捨てる心をも捨てた」一遍の心が、自然や人情を借りて表現されたすぐれた歌があります。たとえば、

旅ごろも木の根かやの根いづくにか身の捨てられぬ処  
あるべき

ともはねよかくてもをどれ心ごま弥陀みのりの御法と聞くぞ  
うれしき

名にかなふこころは西にうつせみのもぬけはてたる声  
ぞ涼しき

の三首を代表的なものと思うわけです。

漂泊の歌人として最後にあげた良寛のあとには、これらに匹敵する歌人はいません。だが、良寛の歌のよさを見出した歌人の系列があります。

子規が良寛の歌に万葉調のあることを知ったのは明治三十三年、「病牀読書日記」十一月十四日の条に、

僧良寛歌集を見る。越後の僧、詩にも歌にも書にも巧なりとぞ。詩は知らず。歌集の初にある筆蹟を見るに絶倫なり。歌は書に劣れども万葉を学んで俗氣無し。

と評して歌二首をあげ、「所謂歌人に勝ること万々」といっております。

子規が良寛に言及したのはこれだけです。これを受けて、伊藤左千夫が良寛の多くの歌をあげて評論し、さらに茂吉によって良寛の歌の評価が定まりました。

こうしてみると、漂泊の歌人としての一遍とその郷土から、正岡子規が出たことにゆえなしとすることはできません。

#### 四、生きざま

文永十一年（一二七四）、三十六歳の智真は、三人の尼僧を同行として伴い熊野への旅に発ちました。そして、まずひじりたちのたむろする天王寺に参籠、その西門の下で、用意して来た念仏札を渡し「一遍の念仏」をすすめました。これが最初の賦算です。その後、高野を経て熊野に入り、三山の巡礼を終わったところで「一遍の念仏」の普遍的意義を確かに領解することができ、「一遍」と号するようにもなりました。

この「一遍の念仏」という言葉は、中国浄土教以来の「一念」に相当するもので、わが国浄土教の祖師たち法然・親鸞などすべてこの言葉を用い、その意義は、一遍の説く意味でいいますと、念仏を唱えて自我の心が消え、生まれたときのままの純粋な気持ちになったとき、正念を得たといいい、この正念、いいかえると真実の心が一念にはかなりませんが、そのような心で唱える念仏のことです。

ところが、一遍の説く「一遍の念仏」の原義の背景には仏教的時間論があります。仏教的時間の基本は「刹那」と呼ばれるもので、道元の時間論における「前後際断の今」、「而今」、「ただ今」であります。一遍にも「三世断の時」という表現があり、

非連続の刻々の時であるただ今には、全身全霊を込めた一度の念仏しかありません。今が念仏の時、この刻々の今における刻々の念仏により、生きながら往生することができるといふものがあります。くりかえしますと、「一遍の念仏」とは、ただ今における一度の念仏、すなわち、「当体の一念」であります。一遍の思想は、遠くは仏説にもとづく思想、近くはこれを受けて強調した西山浄土教（一遍の祖師証空の教え）の「機法一体」によるもので、機すなわち人に即していえば私たちの称える一遍の念仏、法の上からいえば普遍的意味をもつ一念、ということになります。

子規の時間論も全く同じで、道元によって明かにされている空間即時論の論がそれです。一遍流にいえば念仏の時が今、行動の時が今ですが、文芸の立場からいえば、花の咲いた時が今、花が春という時をあらわすというわけです。ただ今という極限された時における事物（空間）を写す、その対象の次の時における姿への変化を時の推移として捉える、これが写生の根本であります。

また、余命いくばくもないという自覚のもと、刻々の時を惜しみ、病身をはげまして苦闘するさまは、まさに鬼気迫り、われわれを感動させるものであります。この根底にあるのも、今が行為の時であるという道元的時間思想であります。詩としては少々まずいのですが、「吾等が受くる楽みは 今の今なり。今を置きて、思ひ出すべき昨日なく、推し測るべき明日も無し、吾等が暮らす生涯は、今と今とのつづきにて、楽と楽とのくさりなり」（明治二十九年）という新体詩そのほかに見られます。そして、早朝

訪れる新聞や牛乳配達、一番列車などの音に時を知り、それらの移り変わりに時の推移を感じ、一方では、短い歳月に成しとげた仕事の多さに、長かった回想の時にある程度の満足を感じながら、短い生涯を終えました。

子規は仏教にあまり興味を示しませんでした。が、禅宗や真言宗で僧籍にある知己をもち、坐禅観法や即身成仏など、仏教に関する理解はかなり進んでおり、わけて真宗や法華経に関しては関心が深かったようです。特に日蓮への傾倒が深かったことは「養病日記」「病余漫吟」にあるとおりで、日蓮の積極的な行動に心が引かれていたのではないかと思われまます。

子規には、すでに早く二十八年の十二月ごろ、「死はますく近づきぬ」という自覚とともに、一方では「文学はやうやく佳境に入りぬ」という期待もあり、「文学と討死の覚悟にて御座候」という覚悟もできていました。そして、病の進んだ三十四年二月ごろになっても、自己の死を客観的に感じる余裕がある一方、来る人ごとに病気の苦しさを訴え、死ぬることばかりを話すようになりました。そして最後の年の六月十九日からの「病牀六尺」では、どのようにして日を暮らすべきか、だれかこの苦を助けてくれるものがあるまいか、と連日苦しみを訴えています。が、このごろすでに、「余は今迄禅宗の所謂悟りといふ事を誤解して居た。悟りといふ事は如何なる場合にも平気で死ぬる事かと思つて居たのは間違ひで、悟りといふ事は如何なる場合にも平気で生きて居る事であつた」（六月二日「病牀六尺」という悟りに達していま

した。

子規は、早くから仏教の根本義を理解し、如来と我と隔つる所なき也と言ひ、我も人も釈迦も阿弥陀も皆これ仏ととらえ、草木国土悉皆成仏という意味を理解して、「糸瓜サへ仏三ナルゾ後ル、ナ」（仰臥漫録）と詠んでいました。すると、糸瓜に託した辞世三句のうち、特に

糸瓜咲て痰のつまりし仏かな

の意味も明かです。子規も仏になった、糸瓜も仏になった、子規は「糸瓜仏」という仏になりました。

一遍は、臨終を前に、「一代聖教みなつきて南無阿弥陀仏になりはてぬ」と言いました。「南無阿弥陀仏」いう仏になったという意味です。有名な柳宗悦に名著『南無阿弥陀仏・一遍』がありますが、この標題は、「一遍即南無阿弥陀仏」という意味にも受け取れます。

一遍と子規との間で著しい相違は、捨て聖といわれた一遍自身は、著作はおろか一片の記録も残さなかったのに対し、記録魔ともいわれる子規が、冒大な著作のほか多くの記録を残したことです。

一遍は最後に郷里を発つにさきだち、繁多寺に参籠、父如仏がかつて京都で西山派証空に学んだ際、書き入れをしていた浄土三部経を譲り受け、遊行に携行してましたのをこの寺に納めました。また、かつて大和の当麻寺に参籠した際、特に、中将姫がこの寺に奉納した何冊もの称讚浄土経（阿弥陀経の異訳）の写本一

冊をもらい受け、ずっと持ち歩いておりましたが、これは兵庫観音堂で臨終の前、姫路の書写山田教寺から来ていた僧に託してその寺に奉納しました。ちなみに、浄土三部教は、繁多寺が明治時代に焼失した際失ったとみられ、称讃浄土経は、円教寺から遊行寺に納められて現存しています。なお、ほかにごくわずかの経典や注疏の類、自らが書き抜いた抄物なども持っていたでしょうが、これら一切を焼却してしまいました。ですから、現に一遍の伝記や思想を知ることのできる一遍聖絵・一遍上人縁起絵・一遍上人語録などはすべて後の作であります。

このように、一遍と子規では、著作などについては対称的です。が、弟子や人々の心に伝え残したものは、どちらにも大きいものがあります。一遍は、さきにも記しましたように、一切衆生に念仏を残しました。子規は、文学革新の大業を残し、わが国近代文学に方向付けを与えました。

わが郷土に誇るべきものは、時代順にいつて、第一に一遍、第二に子規です。そして両者から学ぶべき宝の大きいことを痛切に感じる次第です。

(昭和六十三年四月二十九日、子規記念博物館特別展「河野氏と一遍」記念兼松山子規会四月例会講演) (松山子規会幹事)

## 第八十七回子規忌献詠

白萩のこぼるゝ庭や獺祭忌  
 中の川に育ちて住まず子規祀る  
 青柿の蒂のしまりや子規忌来る  
 二良翁おみえにならず子規忌かな  
 もう一度師よと祈りつ糸瓜の忌  
 越智先生の健ひたすらに子規御忌  
 ひとすじの句のみち遠し子規祀る  
 銅蓮を零る水音獺祭忌  
 しみじみと八十七回獺祭忌  
 子規祀る千百号のホ誌供へ  
 古稀となる吾に尊き子規忌哉

千鶴子  
 隆代  
 十重  
 瑞子  
 重一  
 つや女  
 和鴻  
 茂女  
 極光  
 山陰  
 一子  
 ヒサ  
 冬耕子  
 好乃  
 圓舟  
 春風  
 緑葉  
 梨栄

年毎に慕者の増せる子規忌かな  
子規語る人ばかりなる子規忌かな

露こゝだ花缺の音瀬祭忌

髪塔に糸瓜供へて子規まつる

子規忌げふあたり染めたる朝茜あかね

ありがたや八十九翁子規祀る

ガレージに糸瓜ふらりと子規忌かな

なでしこの川原彩り子規忌来る

子規の倍生きし今年あかねの瀬祭忌

歌仙捧ぐ「噴井」の巻や瀬祭忌

千草風城くきやかに見ゆる今あかねしたいて

まつる子規の横顔

夕空は閻浮檀金えんぶたんごんに稲は穂に咲き揃ひた

り夕顔の花

春風

錦水

春江

和鴻

虚舟

文子

里風

律子

春

米蔵

米蔵

編集の窓

論文

子規「痰一斗」 鎌田五郎 「アララギ」 昭和六一、一〇

一、二

子規庵の子鴨と盃 今西久穂 「未来」 昭和六一、一一

子規歌風成立の要因 丸山茂樹 「雪線」 昭和六一、一二

『歌よみに与ふる書』 米田 利昭 「放水路」 昭和六二、

一

子規俳句の漢訳(3) 工藤茂 「蓆」 昭和六二、三

子規庵の周辺のこと 最上巴他 「榆」 昭和六二、三、九

子規の俳句表現と字余り俳句 松岡満夫 「表現研究45」

昭和六二、三

正岡子規の俳句 小西昭夫 「糸瓜」 昭和六二、三

子規の背景(9) 秋尾敏 「軸」 昭和六二、四一〇

子規における俳の贅―その俳句と生活 平井照敏 「俳句」

昭和六二、四

花という贅―子規の場合 坪内稔典 「俳句」 昭和六二、

四

子規居士の手紙―瓢亭に宛てたもの 福原雨六 「俳星」

昭和六二、四

映像俳話―子規北限の句碑 田原憲治 「俳星」 昭和六二、

四

鷗外と子規 松井利彦 「風土」 昭和六二、四

正岡子規「小説便覧」 渡部直己 「ユリイカ」 昭和六二、

四

子規の「韻さぐり」 山田みづえ 「青樹」 昭和六二、五

子規と文明の教え 国見純生 「短歌」 昭和六二、五

子規の死に方 細川謙三 「未来」 昭和六二、六

子規を世に出した古島翁―病牀六尺聴書(8) 伊藤喬 「波」

昭和六二、六、七

子規と法隆寺 和田悟朗 「岳」 昭和六二、七

正岡子規の見た雪月花 八木絵馬 「俳句」 昭和六二、七

子規における革新と伝統 清水孝之 「林苑」 昭和六二、七

子規の画論の周辺 中野韶子 「林苑」 昭和六二、七

正岡子規論(一)消えた白猫 山下一海 「冬野」 昭和六二、七

正岡子規論(二)明治十九年の一頓挫 山下一海 「冬野」 昭和

六二、八

短詩型プレイヤー子規 平出隆 「現代詩手帖」 昭和六二、

八

子規・虚子の写生方法―物と我―松井利彦 「風」 昭和六二、

九

正岡子規・秋海棠の写生 林徹 「雉」 昭和六二、九

子規と柿 安部光塵 「瑠璃」 昭和六二、九

子規のころ 長谷川柳三 「俳句公論」 昭和六二、一〇

鳴雪の日常と病歴―鳴雪と子規63―和田茂樹 「星」 昭和

六二、一二

(新資料) 竹村鍛の新婚を寿ぐ子規書簡 和田茂樹 「星」

昭和六三、一

対談「プロレタリア俳句の原典」 瓜生敏一・和田茂樹

「子規博だより」 昭和六三、三

村上霽月翁の転和吟管見―子規居士・漱石子の転和吟より―

中川貴好 「子規博だより」 昭和六三、一

金州北門外と西門(中国の子規(七)) 和田克司 「子規博だ

より」 昭和六三、一

新資料「松風会句稿」 和田茂樹 「子規博だより」 昭和

六三、一

拓川とその家族(下)―拓川夫人加藤ひさ―(加藤家と正岡家(2))

宝来淑子 「子規博だより」 昭和六三、一

鳴雪逝く(一)―鳴雪と子規64 65― 和田茂樹 「星」 昭和

六三、二、三

金比羅さんと子規―青年時代の子規の宗教考― 山上次郎

「ことひら」 昭和六三

対談「南無阿弥陀仏」と「糸瓜仏」―一遍上人と子規居士―

越智通敏・和田茂樹 「子規博だより」 昭和六三、三

蔵真一郎宛長塚節葉書十四葉 大戸三千枝 「子規博だより」

昭和六三、三

金州南門城楼(中国の子規の) 和田克司 「子規博だより」

昭和六三、三

正岡子規・俳句短歌の植物 日野正寛 「子規博だより」 昭

和六三、三

(特集) 正岡子規の人と書 「書道研究」 昭和六三、三

内容 子規の絶筆に「本物の書」を考える (村上三島)

評伝・正岡子規(和田克司) 書簡からみた子規と近代文学

(山上次郎) 子規における「書くということ」活路を開く子

規(坪内稔典) 正岡子規年譜 (和田克司) 正岡子規

歌・句・詩碑一覽 正岡子規著作目録・文献目録

鳴雪追慕、句碑一鳴雪と子規66 和田茂樹 「星」 昭和六

三、四

子規と鷗外(一)その出会いについて 和田茂樹 「星」 昭

和六三、五

子規と鷗外(一)俳句会稿をめぐって 和田茂樹 「星」 昭

和六三、六

子規の俳句観 西崎清久 「子規博だより」 昭和六三、六

子規と南山閣 永野孫柳 「子規博だより」 昭和六三、六

金州関帝廟と孔子廟 和田克司 「子規博だより」 昭和六三、

六

正岡子規と南伊予の人びと 白田三雅 「子規博だより」 昭和

六三、六

一遍の和歌 田村憲治 「子規博だより」 昭和六三、六

正岡子規俳句短歌の植物(6) 日野正寛 「子規博だより」 昭和

六三、六

子規と鷗外(三)「めさまし草」をめぐって(1) 和田茂樹 「星」

昭和六三、七

子規と鷗外(四)「めさまし草」・神仙体(2) 和田茂樹 「星」

昭和六三、八

子規と鷗外(四)神仙体俳句 和田茂樹 「星」 昭和六三、九

感沢墨竹と子規の絵 石井南放 「子規博だより」 昭和六三、

一〇

子規山脈 山本健吉 「子規博だより」 昭和六三、一〇

金州・山東会館(中国の子規10) 和田克司 「子規博だより」

昭和六三、一〇

子規と鷗外(四)「めさまし草」(3) (5) 和田茂樹 「星」

昭和六三、一〇一・二

金州北郊(中国の子規11) 和田克司 「子規博だより」 昭和

六四、一

正岡子規と南伊予の人びと(2) 白田三雅 「子規博だより」

昭和六四、一

子規における俳句と短歌 宮地伸一 「子規博だより」 昭和六

四、一

正岡子規俳句短歌の植物(7) 日野正寛 「子規博だより」 昭和六四、一

### 著作

子規三大隨筆 正岡子規 講談社学術文庫 昭和六三、三一、二〇〇円

子規・漱石写真ものがたり 風戸始 松山子規会 A5版二四六ページ

一〇二、〇〇〇円

### 雑報

○昭和六十三年九月十八日、子規記念博物館において、第八回「子規を考える一日」が開催され、当日発表の作品は、同館友の会から発行(十一月十九日)の作品集に掲載された。

○同年十一月十三日、子規記念博物館で開催された「子規顕彰短歌大会」において、宮地伸一氏の講演「子規における俳句と短歌」があった。

○同年十一月二十三日、子規記念博物館において、「松山市小中高俳句大会」が開催された。

○同年十一月二十六日、南海放送テレビで、愛媛の昭和史「子規山脈の系譜(俳句王国の足跡)」が放映された。

## 入会案内

### 松山子規会

例会 毎月十九日 会場は正宗寺

内容は講演と談話

「子規会誌」の発行

特別寄稿と例会講演

季刊 四月、七月、十月、一月

年間会費 一、〇〇〇円

入会金不要

郵便振替 徳島二一八六八 松山子規会

連絡先(事務局)

松山市岩崎町二丁目四十二

渡部 満 泰

### 子規会誌 四〇号

季刊(四、七、一〇、一月)

発行日 昭和六十四年 一月十九日

発行 松山子規会

松山市末広町正宗寺内

郵便振替 徳島二一八六八

印刷所 青柳堂

松山市東長戸二丁目一三九

さし上げる心づかいと

いただいた喜びが

優しいハートニーを

奏でる贈り物。

贈る気持を大切にします。

三越の商品券



500円券から100,000円券まで、ご予算に合わせて各種ご調製いたします。また、お札とほぼ同じ大きさのコンパクトな商品券(500円券・5,000円券・10,000円券の3種類)もございます。

全国の三越本・支店及び関連会社・提携店でご利用になれます。

●1階商品券売場●



MITSUKOSHI  
松山 千790 松山市一徳町3-1-1  
TEL/0898-45-3111(大代表)

松山を代表する

# 銘菓「子規」・醤油餅

松山市道後湯之町商店街

## 巴堂本舗

TEL 0899 (41) 3452

会議・御会食をホテル春日園へ  
四季の移り変わりを楽しめる露天  
岩風呂で一句ひねってみませんか。

政府登録国際観光旅館

# 春日園

ホテル

〒790 松山市道後鷺谷町3-1

☎(0899)41-9156



お食事処…かすが…

石畳、格子戸、木の香もかぐわしく  
くつろぎのときに情緒ひとしお

## 熱河の百八日

上田 雅一 著 B6判  
1,400円

1940年、旧満州熱河省に地形  
測量隊の軍属として赴いた著者  
が見聞を書きとどめた興味深い  
古日記。

新刊

## 一茶と山中家の人々

山上 次郎 著 B6判  
3,000円

寛政7年、西国旅行の途上、  
土居山中家に俳人時風を訪ねた  
一茶の足跡と山中家の歴史をた  
どる。

オフセット印刷  
図書出版

(有)青葉図書

松山市小栗6丁目3-23  
☎(0899)43-1165